

題 目 適応方略としての作為・不作為 - 「トロッコ問題」を用いた比較社会的検討 -

氏 名 山本翔子

指導教員 結城雅樹

本研究の目的は、倫理判断研究における有名な問いの 1 つであるトロッコ問題 (Trolley problem: Foot, 1967) において、人々が行う倫理判断と行動意図のずれのパターンに文化差がみられる原因について、比較社会生態心理学の観点から検討することである。

トロッコ問題とは、多数(5 人)の人々が被害を受ける状況から別の少数(1 人)が被害を受ける状況に人為的な変更を施す行為の道徳的正しさを問う、有名な倫理判断問題である。人々の倫理判断を実証的に検討した先行研究では、多くの人々は進路変更を倫理的に正しいと判断するが、一方で進路変更を正しいと評価しない人も少なからずいることが示されている (Cushman, Young, & Hauser, 2006)。

トロッコ問題における倫理判断に影響する可能性のある要因の一つとして検討されてきたのが文化である。しかし、倫理判断は文化によって異なることが先行研究により示されてきた (Hauser, Cushman, Young, Jin, & Mikhail, 2007)。一方、中国とイギリスとの間で倫理判断に加えて行動意図(自分ならば変更するか)を調べた Gold, Colman, & Pulford (2014)において、倫理判断では生じない文化差が行動意図のみでみられ、中国人よりイギリス人で 5 人から 1 人の犠牲への変更意図が高いことが示されている。ここから、文化は倫理判断には影響を与えないが行動意図には影響することが示唆される。

それでは何故文化は行動意図のみに影響するのだろうか。本研究では行動意図のみで文化差が生じる原因、言い換えると倫理判断と行動意図のずれの程度に文化差が存在する原因を、社会生態学的視点に基づき、当該社会の関係流動性の高低によって、期待される評判が異なることに求めた。関係流動性とは、個人を取り巻く特定の社会または社会環境に存在する対人関係の選択機会の多寡のことであり、当該社会環境における新たな対人関係の形成、および既存関係の維持や解消の自由度を指す(Kito, Yuki, & Thomson, 2017)。欧米を代表とする高関係流動性社会では、対人関係を能動的に構築する必要があり、構築可能性にいち早く気づくため他者からのポジティブな評価に注目する (Adams, Anderson, & Adonu., 2004)。一方、東アジアに代表される低関係流動性社会では、新規関係獲得機会が少ないために既存集団からの排斥が致命的となり、他者からのネガティブ評価の可能性に注目する (Yamagishi, Hashimoto, & Schug, 2008)。倫理判断は自分自身の考えを反映する一方、行動意図は自分自身の考えに加えて他者評価も反映する (Firth & deVignemont, 2005) と言われている。よって関係流動性の違いは行動意図のみに影響し、高流動性社会の人々は、変更に対してポジティブ評判がなされる確率を相対的に高く見積もる結果、変更を選択する。一方で低流動性社会では変更に対するネガティブ評判を高く見積もる結果、不変更を選択する。

上記を踏まえ研究 1 では、関係流動性の異なる日本とアメリカでの国際比較調査を行いトロッコ問題における倫理判断と行動意図を調べた。その結果、先行研究と同様に、1)倫理判断には日米差がない一方、行動意図はアメリカの方が日本人よりも高かった。さらに2)変更へのポジティブ評判期待は日本人よりアメリカ人で高くなり、予測通り3)行動意図の日米差は関係流動性が高いほど、変更に対する他者からのポジティブ評価が高いと参加者が予測することにより説明された。

研究 1 の問題点を改善し、研究 2 でも同様に日米での国際比較調査を行った。その結果、1)倫理判断と行動意図のずれのパターンに日米差がみられ、アメリカ人よりも日本人でずれが大きく。さらに、2) 変更へのポジティブ評判期待は日本人よりアメリカ人で高く、ネガティブ評判期待はアメリカ人より日本人で高くなり、予測通り3) 倫理判断と行動意図のずれの日米差は、関係流動性が高いほど、変更に対するポジティブ評価を高く、ネガティブ評判を低く参加者が予測することにより説明された。また、倫理判断と行動意図のずれのパターンの日米差が、日米で信念・行動一貫性の重要度が異なる(増田・山岸, 2010) 結果生じているとの対立仮説を棄却すべく、従来の犠牲が人の場面と対比して、犠牲が荷物の場面を作成し比較を行った。その結果、人が犠牲となる場面では、倫理判断を統制しても国の違いが行動意図の違いを説明したが、荷物が犠牲となる場面では、すべて倫理判断の違いにより説明され、対立仮説は棄却された。

本研究では倫理判断と行動意図のずれのパターンに文化差が生じ、欧米社会であるアメリカよりも東アジア社会である日本において、よりずれが大きいことが示された。さらにこの原因として、日米の関係流動性の違いによって変更に対する評判期待が異なり、関係流動性の低い日本よりも関係流動性の高いアメリカで変更へのポジティブ評判期待を高く、ネガティブ評判期待を低く持つことが挙げられることが示された。これらの結果は、これまであまり注目されてこなかったトロッコ問題における倫理判断と行動意図のずれのパターンの文化差に着目し、社会生態学的観点から検討した点で意義がある。